

軽井沢のくらし研究会 について

1. なぜ、いまこの活動が必要なのか？【立ち上げの背景】

軽井沢のくらしは、いま、どんな段階にあるのでしょうか。

先祖代々暮らしている方、最近移住された方、二地域で生活している方、別荘をお持ちの方、軽井沢でお仕事している方。様々な軽井沢経験を持つ住民たちが、それぞれのくらしの課題や理想を抱えています。しかし、私たち住民が日々感じる「もっとこうだったらいいのに」「ここが困っている」という小さな願いが、いつしか「役場に言うほどではない」「言ってもどうせ無理」と、心の奥にしまわれてはもったいないと考えています。この町で暮らす私たちが、自分の声を諦めてしまうことは、この町の未来を諦めることと同じです。私たちは、そんな「小さな声」をすくい上げ、一人ひとりが自分の手で軽井沢の未来を動かしているという実感を取り戻すために立ち上がりました。

また、全国的な自治会加入率の低下や担い手不足は、軽井沢にとっても他人事ではありません。人口は増えているのに、小さな声とともに支え合いの仕組みが薄れていく。そうなる、実は困ることが増えていきます。孤立死、高齢者の見守り機能の低下。災害時の対応能力の低下。公園や道路の維持管理が行き届かなくなる。野生動物対応も、近所が知り合いなら助けを求めやすいが、その関係が希薄では難しくなる。子育て世代へのサポートも手薄になる。「暮らしにくい」と判断した若い世代は、既に近隣の自治体へ移転し始めています。軽井沢はすでに「選ばれない町」になってきているのです。

2. 住民のウェルビーイング（幸福）を真ん中におく【目的】

軽井沢のくらし研究会の最大にして最終の目的は、軽井沢町が目指す「住民の幸福度の向上」です。言い換えれば、「ウェルビーイング日本一」を目指すことになります。

そして、その先に見えているのは、新しい庁舎や町内のあらゆる場所で、住民主体の活動が行われている風景です。共助の文化が根付き、行政と住民と一緒に「軽井沢のくらし」をより良くしていく町の実現です。

3. 多様な声を聞く【私たちのスタンス】

軽井沢には、本当に多様な立場の人がいます。

野生動物が庭に来ることが嬉しい方もいれば、畑を荒らす害獣とみる方もいる。人出が増えて安心という声もあれば、静けさが失われるという声もある。夏は工事がなくて静かに過ごせるという方もいれば、必要な工事が進まなくて困る人もいる。

こうした多様な声を「どう活かすか」が問われています。

同時に、私たちは「対話に飽きている」という課題にも気づきました。こちらが開く場へ来てください、という呼びかけだけでは、話し合いが得意な人、好きな人しかいらっしやいません。こちらから「聞かせてください」と出向いて、住民の一人ひとりの暮らしの中で、丁寧に話を聞くスタンスへの転換が必要です。「町のことは考えているけれど、役場に頼るほどではないかな。自分から何かするまでもないかな。」そんな、住民の皆さんの心の中にある小さな思いを、そっと引き出す。それが、まちづくり支援の丁寧かつ重要な一歩です。さらに、聞いて終わりではなく、コーディネーターが役場と住民と連携し、解決まで伴走する仕組みも必要です。

私たちは、正解を提示するのではなく、住民の皆様の声に寄り添い、一人ひとりの「小さな思い」を大切にすくい上げることを最優先とします。声の大小に関わらず、すべての声が軽井沢の未来を形づくる重要な鍵であると信じています。

4. 支援者として、まちづくりのエコシステムを作る【役割】

軽井沢の暮らし研究会は、直接的なまちづくり活動の主体ではなく、住民や団体による活動の成長と、その成果が地域全体に広がるための「基盤づくり」および「サポート体制」を担う支援組織として位置付けています。

具体的には、以下の4つの役割を果たします。

① 住民の声を「集め、つなぐ」プラットフォーム

軽井沢町役場の全ての部署や、まちづくりに関わる住民・団体と対話をしながら、「暮らしの課題」「やりたいこと」という生の声を丁寧に集めます。同時に、秋に実施する大規模な住民アンケート（ウェルビーイング調査）では、「幸福度」「豊かさ」など、数字では見えてこない住民の願いを探ります。これらの声は、町全体の「現在地」を示すデータになり、これからのまちづくりの方向性を示す羅針盤となります。

② 住民の声を聴き、活動を支援する「暮らしコーディネーター」を育成・配置

住民の声を直接聴き、その思いをまちづくり活動につなげるのは、暮らしコーディネーターです。研究会は、このコーディネーターを募集し、育成し、活動を支援します。コーディネーターは住民からの相談や要望を受け付ける窓口を運営し、集まった声を整理して、関連する団体や役場へつなぎます。つまり、住民と地域活動をつなぐ「橋渡し役」として機能する人材なのです。

③ 活動する人や団体が「学べる場」「支援を受ける場」を提供

ヒアリングとウェルビーイング調査の結果をもとに、町の現在の課題やこれからのありたい姿について考える対話会や、実践的なまちづくりについて学ぶ勉強会を開催します。また、既に活動している自治会、消防団、民生委員、社会福祉協議会、ボランティアセンター、医療・福祉・教育施設などが、より良く活動を続けられるための支援も行います。

④ 地に足のついた活動を「可視化し、応援する」

煌びやかなイベントや政策ではなく、毎日の生活を支える活動——自治会の見守り、消防団の訓練、民生委員の相談、ボランティアセンターの活動など——こうした**活動の価値を可視化し、応援すること**が、私たちの重要な役割です。「こういう活動ってカッコいい。自分たちも関わってみようかな」そう思える環境をつくることで、**活動の担い手が自然に増えていく仕組み**を目指しています。

5. 向かう先：「共助の文化が当たり前」なまちへ

軽井沢のくらし研究会が目指しているのは、「創造のために人々が集まるまち」です。

消費されるまちづくりではなく、この町が好き、大切に思う気持ちをもってより良いまちを共に作っていく——そうした**主体的な活動が、至る所で生まれ、育ち、つながっていく状態**を目指します。

若い世代が軽井沢のまちづくりに関わることが、「カッコいい！」と思える町。共助の文化が当たり前にあって、互いに気かけ合い、気軽に声をかけ合える安心のコミュニティ。

軽井沢が大好きで、「ここの暮らしをより良くしたい」と願う住民の方々が、自律的かつ主体的に活動できること。私たち軽井沢のくらし研究会は、そのための学びと実践の場を整え、皆様の挑戦を最大限にバックアップしてまいります。